

多元化社会の生活関心の会で

林 知己夫

生活関心グループにはいろいろの人が加わっていた。政治学者、社会心理学者、経済学者、精神医学者、芸術・芸能関係の方々、そのほか各省の行政関係のエキスパート、それに統計数理、社会現象の数量化を専門にしている私というわけで、議論が多岐にわたることが期待された。他の政策研究グループと異なり、一つのまとまった結論をつくるということではなくて、互いに議論し、そのなかから多元化社会に生きる人達の気持が汲みとれるならば幸いという形でことが進んだ。

果たせるかな、多種多様な話題、それにおびただしく広がりのある意見、方法論の差異によるものの見方、考え方の差異が出てきた。なかなか面白いのである。研究メンバーは実によく出席し、皆出席もまれではなかった。総理も実によく出席された。あまり「発言はなかつたが、議論に熱心に耳を傾けられた。

私は、かねて政治家というものは大変な仕事であると思っていた。私たちの専門分野は、狭い範囲のこと限定して深くつっこめばよいので話は比較的簡単である。総合的に、視野を広くもたねばならぬとしても、それは科学の範囲内のことで、社会の生々しい現象のように相拮抗するもののなかから政策を生みだすように、複雑にして思い悩むようなものではない。政治家は、それこそ森羅万象の動きに着目し、そのなかの動きから重大な徵候を読みとり決断することが必要であるから、安倍清明の「とく識神を使いこなして情報を万般に集めることが重要な基盤となる」。

総理も私どもの研究会に出席され、各種各様の意見のなかから、この多元化社会のなかで生れる一般の人々の生活関心を汲みとられようとしたものと思つ。あれほど忙のなかに出席され傍聴されて居る姿は真摯そのもので心を打たれたものである。研究会の委員は野人そのもので、遠慮することなく自由に激しく意見を開陳し、論じ合つたりデータを解釈し合つたりしていた。多元化社会について、意識が多元化されることはみえて、案外単純な核心があるという意見も出され、ものの見方、切り込み方によつて明確な姿を露呈させ得る」とも話題に上つた。私は、世論調査のもつ性格、それを読むことにしての注意、世論調査のデータの示す徵候の意味、世論調査を活用する」との意義などをしゃべつたものである。にぎやかな議論のなかを退席される後姿に、政治の頂点に立つ人の自信と苦悩と孤独を感じたのを覚えて居る。

昭和五十四年十月選挙、自民党支持率の最高、安定多数獲得といつからつてない諸予想の一一致にもかかわらず、かつてない敗北が現前した。しかし、これが政治意識の変化を意味するものでなく、一連の暗雲の飛来であったことは、その後の調査が示しているが、議席数不足が政情不安を生み、総理も会に出席されることが少なくなつた。残念なことであるが、会の模様は補佐官の方々から伝えられていたことと思つ。

昭和五十五年五月末の衆議院議員総選挙の街頭演説のなかに、人々の生活関心に対するきめ細かい配慮がじみでて居ることを、少なくとも私は読みとることができ。選挙中の不幸に対しても何とも申し上げようがない。残念至極のお気持であつたことと思い、思い出すたびに涙を禁じ得ない。

私は、研究会でのお姿、選挙前の時期の人間業とは思えないほどの多忙の1J活躍、選挙中に急逝されたことと衆院選での画期的二八四議席獲得とが重ね合わされて目に映る。これ以上こうJとを知らない。心からJ真福をお祈り申し上げる次第です。

(統計数理研究所長)